

リフィル半年、試行錯誤の現場で「改善策」 2回目以降、門前から最寄りに「切り替え」も

2022/10/19 04:50



リフィル運用の改善策を話す多久和氏

リフィル処方箋制度が始まって半年。日本保険薬局協会（NPhA）が手引を策定するなど応需体制の整備に向けた取り組みが見られる一方、現場レベルでは試行錯誤が続く。千葉県市川市南部を中心に展開するアオノのファーマシーアオノ薬局は、薬剤師向けのチェックリストを作成。薬局、患者双方が円滑にリフィルを運用できる環境を整えることで、「かかりつけ」としての存在感を高める狙いだ。患者の動き方については、初回は門前で、2回目以降に最寄りの薬局に切り替えるケースもあると考察している。

同薬局は、制度開始当初の運営面に生じた課題と改善策を分析。4月1日から5月17日の約1カ月半で受け付けたリフィル処方箋は18枚で、1日300～400枚受け付ける処方箋のう

ち「1枚あるかどうか」の頻度だったという。そのため「リフィル可」の記入の見落としが問題点として浮上した。

そこで、リフィルの可否に関係なく「リフィル可」の項目に毎回、薬剤師側が鉛筆などでチェックを入れる方式を導入した。さらに、鑑査と投薬の2つの場面で参照するチェックリストも作成し、薬剤師から見えるところに掲示。▽処方箋のコピー作成▽次回の来局案内の添付▽患者の電話番号の把握—といった注意点をまとめ、ミス防止の体制を整えた。管理薬剤師の多久和崇史氏は「投薬直前で気付くことも多く、作業の見落としに対する有効な手段になり得た」と話す。

●調剤可能期間、付箋でお知らせ

患者側が来局予定日を忘れることもあった。2回目以降のリフィルの調剤可能期間は、予定日と前後1週間の計15日間に定められている。同社では、返却する処方箋にこの期間の始まりと終わりの日を記した付箋を添付。さらに「調剤予定日の翌日」と「期間最終日の2日前」に2度、患者に電話する仕組みを取り入れた。

結果として、リフィル処方箋制度を活用した18人のうち、途中で断念したのは1人（調剤可能期間を過ぎ、通常の処方箋に変更）。大半は制度通りの運用ができた。また、リフィル制度を活用した患者は、以降もリフィル処方されているという。

●増えるリフィル「1回目から」選ばれるように

10月現在、開始当初に比べてリフィル処方が増え、1日に5～10枚を応需している。増加分のほとんどは、順天堂大医学部附属浦安病院（千葉県浦安市）の処方だ。同薬局は、東京メトロ東西線の駅近くに立地していることもあり、「日常生活の中で利用しやすい薬局として処方箋を持って来てもらえている」（多久和氏）とみる。

一方で、1回目は同病院の門前薬局で、2回目以降はアオノ薬局で調剤を受ける患者も一部にいるという。多久和氏は「受診直後は門前、2回目は住んでいるところの近くが選択されているのでは」と分析。その上で、「1回目からでも地域の薬局にリフィル処方箋を持って行く薬物治療上のメリットも示していきたい」と話す。

4～5月の事例と改善策は、今月9、10日に仙台市であった日本薬剤師会学術大会の一般演題として口頭発表した。(折口 慎一郎)

All documents, images and photographs contained in this site belong to JIHO, Inc.

Use of these documents, images and photographs is strictly prohibited.

Copyright (C) JIHO, Inc.

株式会社じほう